

伝統工芸

ギンナンうき



小さな町工場が守り継ぐ メイド・イン・ジャパンの底力

全国の釣りファンから高い信頼を得ている『財津釣具』の『ギンナンうき』。一つひとつのうきを手作りしている会社は全国的にとっても希少です。大量生産、販売が可能なプラスチック製や外国からの安い輸入品も目立つようになってきた中、一貫して職人が作る『木製うき』にこだわり続けてきました。材料は、3年以上寝かせた桧の原木。それを各サイズに製材し、ろくろにはさんでノミをあて成形。約10日かかる『塗り』の作業もすべて手作業で行います。いずれも長年の経験が物をいう職人技。「今は、より繊細なうきが求められています。時代に応じたウキ作りをしていきたい」と話す土肥靖典代表取締役。創業68年。小さな町工場が惜しみない情熱を注いで作る美しい逸品です。



こま職人 井芹 真彦さん

注文家具



家族の暮らしに寄り添う オーダーメイドの家具



親子3代続くオーダー家具の工房『木工房 ひのかわ』。『丈夫で、使い勝手が良く、美しい』を理念として作られる家具作りは、職人が納得する素性の良い丸太を選ぶところから始まります。市場で仕入れる丸太の多くは、樹齢百年を超えるもの。育った樹齢よりもっと永い年月をお客様と過ごせるように、愛情を込めて家具に仕上げられています。1942年の創業以来、テーブル、食器棚、ロッキングチェアなど、日常に寄り添う家具を手掛けてきました。「家の道具と書いて家具。職人にとっては、家具をつくることは家族をつくることという考えです。時とともに馴染み、愛着が湧くオーダーメイドの一品。未来の百年モノを作りたい」と代表の古島隆さん。その想いは、確かに3代目へと受け継がれています。

彦一こま



彦一とんち話がモチーフ! 遊び心あふれる民芸品



一休さんや吉四六(きっちよむ)さんと並んで、『日本三大とんち話』の一つにも数えられている八代の民話『彦一とんちばなし』。主人公・彦一のとんち話をモチーフにしたのが、この『彦一こま』です。愛らしいタヌキの置物が、分解すると笠・頭・胴体・台の4つのこまになり、回して遊ぶことができます。昭和初期から余技としてこま作りをしていた父にならい、1977年に2代目を継いだのが井芹真彦さん。現在も、小さな工房でろくろを挽き、色を塗り、一つひとつを手作りで作り上げていきます。ほぼ一人ですべての作業を行い、年間2000個のこまを作り上げています。「大切なことは頭ではなく体で覚える。しつこく、根気よく続けていくことが大事」と語ります。



肥後高田焼伝七窯 青木 克裕さん



細川公も愛した高田焼は 繊細な象嵌模様が特色

別名八代焼(やつしろやき)の名で知られる高田焼(こうだやき)。加藤清正公に従って渡来した陶工の一人尊楷(そんかい)が、細川家の肥後転封に伴い寛永9年(1632)に、豊前上野(あがの)から八代市に移り開窯したのが起こりとされています。独特の土味と釉調を生かし、高麗風の青磁象嵌をほどこした美しい作風が特徴。材料となる土は日奈久の良質なものが使われています。「最も重要なのは土づくり」という窯元の青木克裕さんは、父の修さんと親子で窯を守っています。「もともと茶陶として始められた高田焼は高価なイメージがありますが、日常で使える器もたくさん造っています。みなさんに歴史のある焼きものに気軽に触れてほしい」と克裕さんは願っています。

高田焼



財津釣具



木工房 ひのかわ 古島 隆さん